

南鎧ヶ崎遺跡の発掘調査成果

山形博康（美郷町教育委員会）

1. 調査要項

所在地：美郷町六郷東根字南鎧ヶ崎地内
調査原因：遺跡地図作成に伴う詳細分布調査
調査主体：美郷町教育委員会
調査期間：令和3年9月1日～9月30日
調査面積：約73 m²

2. 南鎧ヶ崎遺跡の概要と立地状況

美郷町では、平成26年から遺跡地図作成と並行して、清原武貞居城説がある鎧ヶ崎城跡周辺の試掘調査を実施している。南鎧ヶ崎遺跡は、美郷町内中央部の東側山麓にある四天地の集落から旧摩利支天神社参道を上った神社付近の標高170mの場所にあり、現況は山林となっている。飯詰地区の独立丘陵群および出羽丘陵を見渡せる丘陵地に立地する。遺跡の西から北側は、見張り台のような尾根がつづく場所から700m北側にある鎧ヶ崎城跡を見ることができる。

遺跡の近くには、縄文土器（晩期）・石器、須恵器が出土した四天森遺跡や須恵器が出土した四天地遺跡、鎧ヶ崎城跡域付近（詳細な出土場所は不明）から不整形な土器や底部に「他」の文字が記された墨書土師器坏も出土している。

3. 今年度の南鎧ヶ崎遺跡の調査目的とその成果

(1) 調査目的（第1・2図）

南鎧ヶ崎遺跡は、3段の平坦部で構成されている。これまでの調査成果であるが、平成29年に試掘調査を行った最も低い平坦部では、燈明皿または漆皿として使用された11世紀後半の「かわらけ」と呼ばれる素焼きの土器が4点出土した。令和元年に試掘調査を行った平坦部では、一度地山面を削り整地をして、基壇状の盛土を行い、礎石や拳大の石敷をしていることがわかった。盛土層には礎石や石敷が動かないようにする地固めの目的があったのではないかと考えられる。

今年度は、令和元年に調査を行った地点から本遺跡最高位面の平坦部に対して、新たなトレンチを設定して、南鎧ヶ崎遺跡の大まかな全体像を知ることが目的とした試掘調査である。なお、今回の試掘調査地点から東側は谷状に一旦落ち込み、更に山側へ続く地形となっている。

(2) 調査成果（第3図）

今回の調査では、鍛冶遺構1基、焼土遺構2基、土坑5基が見つかった。なお、調査にあたっては、令和元年度に南鎧ヶ崎遺跡の平場を中心にボーリング棒による探索を実施した結果を元に新たなトレンチを4本設定した。

調査区内は、全体を通して表土を15 cm程度取り除くと、土師器や須恵器などの遺物が出土した。出土遺物は、本遺跡の試掘調査を行った3年間のうち、最も多い。

今回の調査による主な遺構である鍛冶遺構は、4トレンチから見つかった。表土下15 cmで確認し、大きさは長径1.26m、短径1.02mである。鍛冶の火処と考えられる赤褐色に焼けた部分は本遺構の中央付近にあり、長径0.52m、短径0.4mである。

本遺構内・外からは、土師器坏破片を含む炭化物や鉄滓が見つかった。また、火処穴の下面からは須恵器甕片も見つかった。なお、鉄滓は、昭和50(1975年)に六郷町史編纂委員会がまとめた六郷の歴史(4)において、本遺跡に近い四天地でも見つかったと記されている。本遺跡内には、この鍛冶遺構を含む作業場のような施設があったと考えられる。4トレンチ内の遺構確認面からは、9世紀後半の須恵器甕破片が見つかった。これらの出土破片は接合可能な個体であった。

焼土遺構は、2・4トレンチで2基確認した。遺構確認面は被熱を受け赤く引き締まっていた。この直上からは、土師器破片が出土した。

土坑は、2トレンチで土師器坏甕片や炭化物とともに5基確認することができた。土坑の一部を半截したが、遺物は少ない。

また、令和元年度に調査した平坦部と今回調査した平坦部の比高差は約2.2mあるが、遺構確認面よりさらに下面への掘り下げは確認できなかった。令和元年度調査と同様、整地地業を行った上で使用されたと考えられる。

また、各トレンチにいえることだが、今回のトレンチ調査では、掘立柱を構成する柱痕跡が見つからなかった。遺跡範囲に対し調査面積が少ないため断定はできないが、ここに建っていた建物は掘立柱ではなく、礎石建物であったと思われる。

4. まとめ_南鑑ヶ崎遺跡とは

町では平成25年度より樹木の間伐や土取り等各種開発行為に対応していくことを目的とした遺跡地図作成に係る詳細分布調査を行ってきた。これまで麓の北側の四天地から南側の蛇沢にかけて四天森遺跡を含む7遺跡が集中することが分かっていたが、南鑑ヶ崎遺跡のように山麓丘陵部で平安時代の遺跡が存在することは想定していなかった。

今年度調査の結果、遺跡内で鉄滓が出土したことから、鉄器等を加工する簡単な小鍛冶が行われたと推定される。このことについては、前述した六郷の歴史(4)にも須恵器破片とともに鉄滓が見つかったと記述があったが、遺物が現存しておらず、不明な点が多々あった。そのため、今回の調査により裏付けられたことになる。

今回の調査も踏まえ、3年間にわたる試掘調査をまとめると、南鑑ヶ崎遺跡の性格は今後検討を要するが、遺跡の主たる年代は9世紀後半から10世紀後半ではないかと想定している。

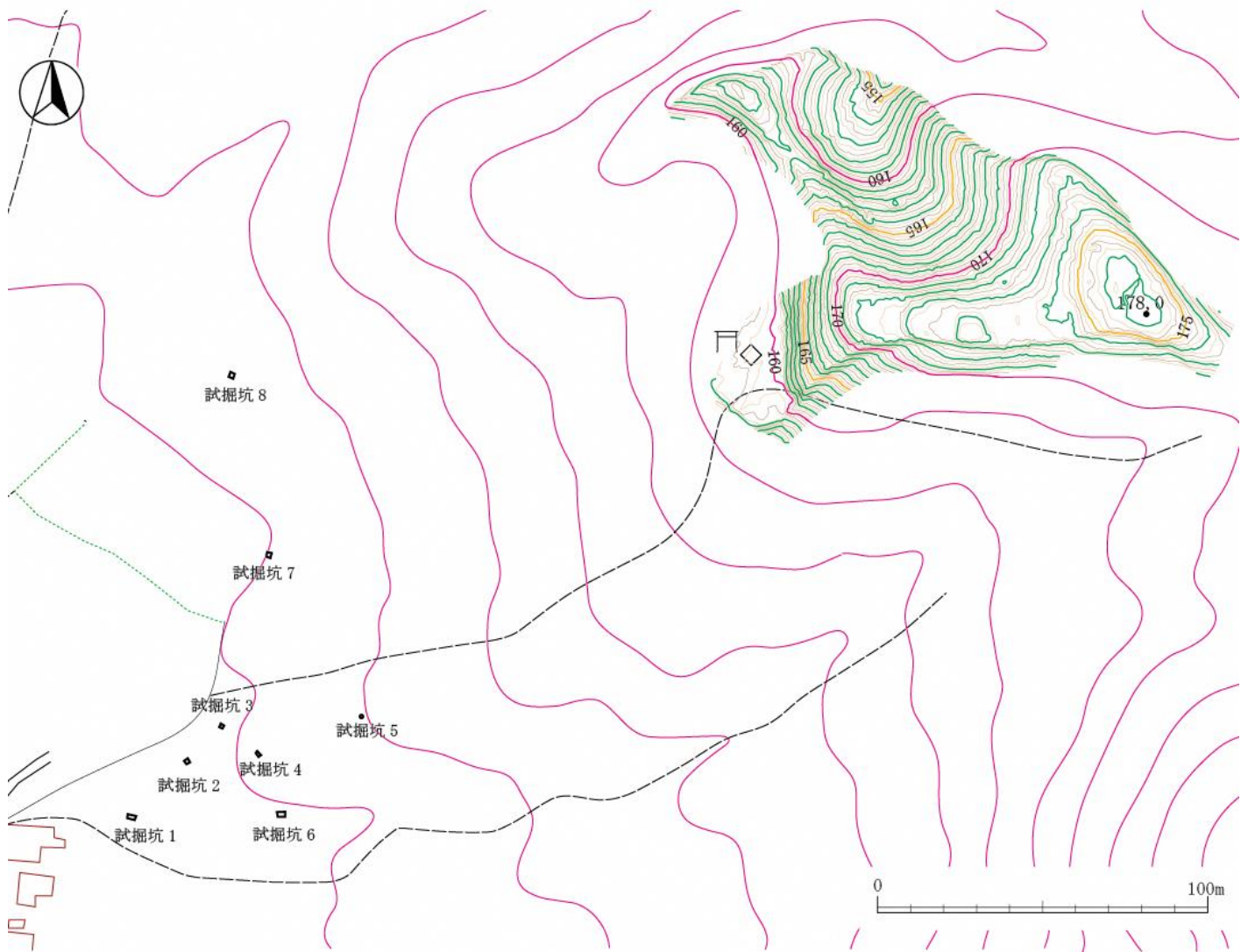
また、南鑑ヶ崎遺跡の試掘調査面積はほんの一部であり、これまで見つかった遺構確認面より下層面の遺構の有無はどうかという懸念があり、柱痕跡が新たに見つかる可能性も想定しておく必要がある。

以上のことを踏まえると、南鑑ヶ崎遺跡は、麓から少し離れた静かな里山に立地しており、小鍛冶を含む何らかの活動が行われたと考えられる。調査の結果、3段の

平場が相互に隣接しながら、面的な広がりが見つかった。また、この場所は奥山に入り込みやすく、当時は交通の要衝の入口のひとつでなかったかと考えられる。

今後、前述した麓にある四天森遺跡を含む 7 遺跡との位置関係も含めて、検討していく必要がある。7 遺跡のうち下四天地Ⅱ遺跡は「寺あと」と俗称される畑地にあり、大正 14 年に武藤一郎、後藤宙外、小西宗吉、伊藤直純が六郷東根地区の史跡調査を行ったとき訪れた遺跡であるが、そのときの所見については知る事ができない。

改めて、四天地の地名の由来__「四天寺」を考えるきっかけとなる調査であった。



第 1 図 南鎧ヶ崎遺跡と周辺地形図



1 トレンチ遺物出土状況



2 トレンチ土坑検出・遺物出土状況



3 トレンチ遺物出土状況



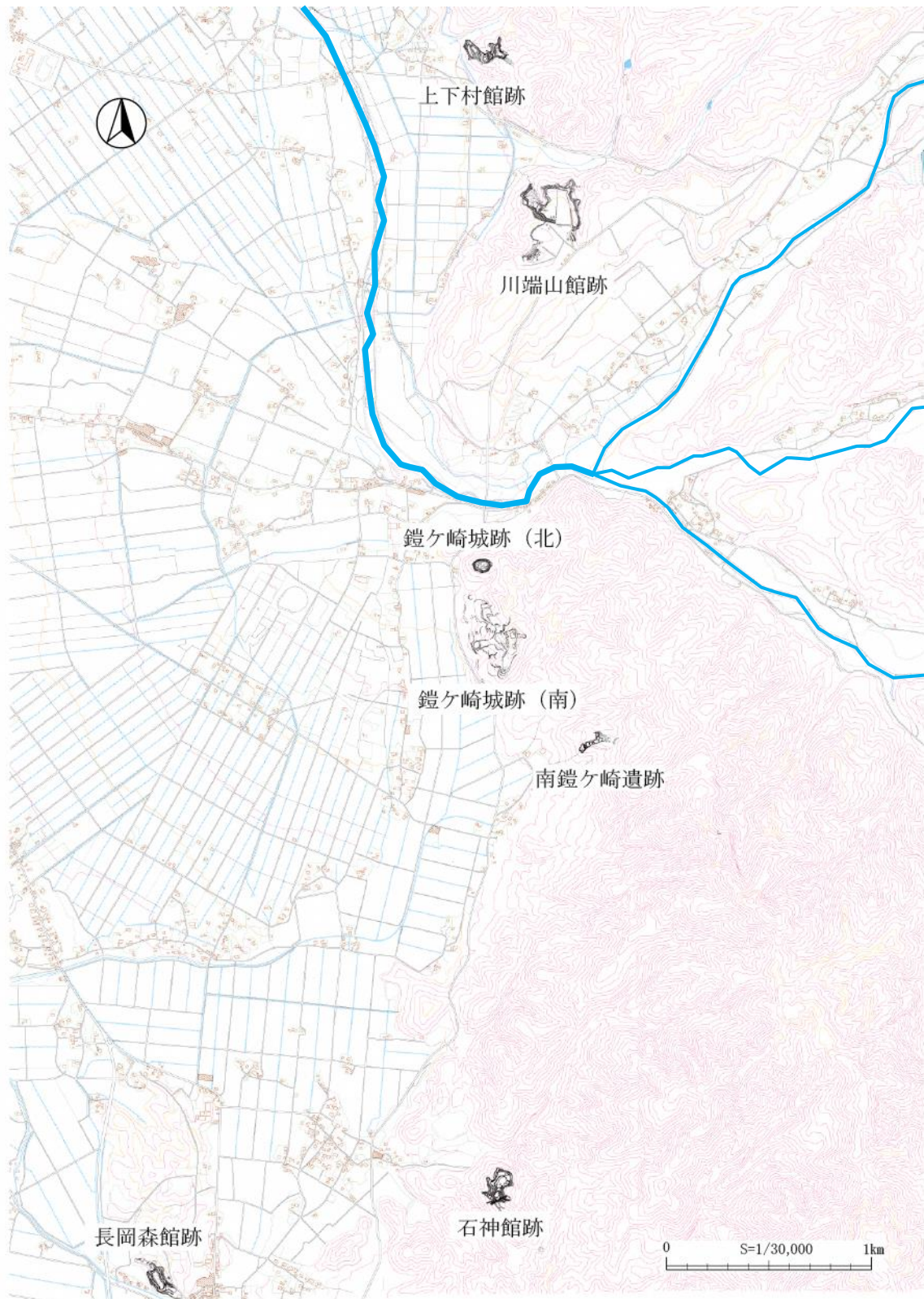
4 トレンチ鍛冶遺構検出状況

令和3年度南鑑ヶ崎遺跡調査写真

鍛冶遺構拡大図



第3図 令和3年度調査トレンチ図



第4図 南鎧ヶ崎遺跡と遺跡地図作成のための踏査を行った遺跡